

1.1.8 浮くはずのないものの浮遊

浮くはずのないものの浮遊により巨大さを強調する建築的手法。マッスを強調した建物を浮遊させたように見せる建築的手法のほか、広告ビルや、美術品の展示方法にも使用される手法。「重厚感」をより一層強固なものにする。例えば浮くはずのない車を浮かせる意外性は、車のスピード感を演出しつつ建物自体の「重厚感」を強調する。そのアンバランスさ（＝浮遊させているものの高さや部材の細さなど）が大きく印象に作用する。



図 イサムノグチの作品



図 メルセデス・ベンツ・ミュージアム
車の展示

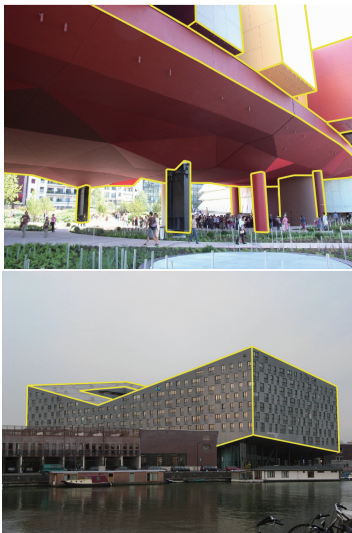


図 上から順に
ケ・ブランリー美術館
ホエール



右図 ラディソン SAS

<ケ・ブランリー美術館 2006> フランス

ジャン・ヌーベル設計。

パリの人類博物館にあった民族学資料の30万点と、国立アフリカ・オセアニア美術館にあった民族美術コレクション3500点を所蔵する、巨大な美術館である。

積み木がせり出したような巨大な物体は、ランドスケープ・アーキテクトのジル・クレモンによる庭園の中に浮かぶように建てられている。

<ザ・ホエール 2000> オランダ

ディ・アーキテクテン・シー設計。194戸の住宅と1100㎡のオフィススペースを収容。太陽光を取り込むために曲げられた上部の凹みが特徴的な建築である。この凹みによって、中庭を囲む壁面の厚みを遠くからも伺い知ることが可能。また、規則正しく開けられた開口により、マッスの印象が強められる一方、足下はパイプによって浮いたデザインとなっている。

<ラディソン SAS ホテルベルリンのロビー> ドイツ

エントランスを入ったアトリウムに巨大な水槽が浮かぶ。外観はごく普通のホテルで、空間のギャップも強烈である。圧倒的な存在感を放つこの水槽の効果で、エントランスは実際よりも巨大に感じられる。

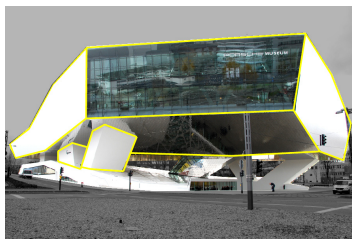
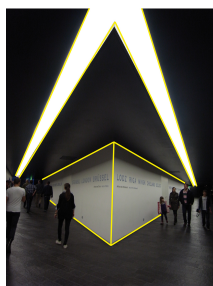


図 ポルシェ・ミュージアム

上 外観

下 展示室への エスカレーター



< ポルシェ・ミュージアム 2009 >

デルガン・メイッスル設計。とてつもなく巨大なボリュームが、三本の柱で持ち上げられる。ファサードの開口はまとめられ、壁面は開口のない白一色である。マッスの強調された極めてフューチャリスティックなその外観は、訪れる者に不思議な感覚を与える。

内部は意外に天井高が低く、圧迫した印象を受けるが、エントランスから展示室へ向かうエスカレーターによって、後述の「洞窟型」ととれるシークエンスの効果が用いられている。

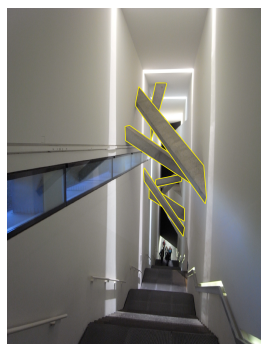
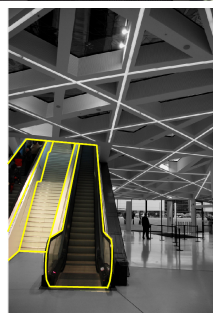


図 ユダヤ博物館

上 階段写真

右 地階廊下

下 地下平面図



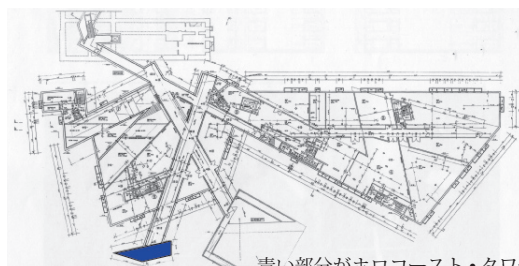
< ベルリン・ユダヤ博物館 2001 > ドイツ

ダニエル・リベスキンド設計。

この建物に出入り口はなく、隣のコレギエンハウスから入って地下のトンネルをくぐり入館する。建物には幾つかのシークエンス上重要な箇所が存在するが、中でも存在感のある部分が美術館内の階段である。

この階段は地下から最上階まで貫いており、入館者は地下の展示の後、この階段を上って移動する。巨大な吹き抜け空間とも言えるこの階段室の上部、コンクリートの太い梁が、壁を貫いている。白い壁と階段の細さが、更に梁の存在感を高める。上部から崩れ落ちるように斜めに貫いた梁が、空間の巨大さ、荘厳さを醸し出す。

なお地下の展示室では天井高は比較的低く、直線的に走ったライトによって、空間の奥行きが強調（→「奥線の強調」）されている。この空間から続く「ホロコースト・タワー」は、トップライトのみの差し込む薄暗く天井高の高い空間であるが、展示のない「展示室」は、来館者の展示経路に空白を与える興味深い空間である。



青い部分がホロコースト・タワー

2 縦・鉛直方向の高さを強調する方法

建物の高さを競うという傾向は今も継続している。高層ビルは世界中で建設されている。ドバイに 2010 年竣工したブルジュ・ハリファは 828.0m で世界一を誇る。しかし、ここで問題にするのは、建造物の物理的高さの数字ではなく、「どうしても上を見てしまう」ような鉛直方向に働く力、すなわち建築物のもつ特性としての心理的「高さ」を強調するための建築的手法である。

1.2.1 縦長プロポーション

縦長プロポーションを用いた建築的手法である。最も一般的な設計手法である。縦に引き伸ばしたようなプロポーションを用いたり、一つの部材（部分）を縦長の細い部材の束のように見せかけるという手法もとられる。

＜『洗礼者ヨハネ』 1220~1230 頃＞ ドイツ

ザンクト・クニベルト聖堂側廊のステンドグラス。縦長のプロポーションで作られた人物像。高さ約 240cm。

＜ゴシック建築の彫刻＞

- ① ベルナルド・ド・モンフォーコンサン・ドウニ修道院
聖堂人像円柱のデッサン 1729 パリ国立図書館
- ② ソロモン王 1180~90 年
ノートルダム・ド・コルベージュ聖堂旧在、現ルーヴル美術館蔵
高さ 238cm
- ③ シバの女王 1180~90 年
ノートルダム・ド・コルベージュ聖堂旧在、現ルーヴル美術館蔵
高さ 228cm

いずれも縦長のプロポーション。聖堂内の装飾（彫刻）に至るまで徹底して縦長のプロポーションを維持。

＜サン・ドウニ修道院聖堂身廊内部 1231~38 頃＞ フランス

大修道院長シュジェール（1081 年 - 1155 年）によって 1144 年 6 月 11 日に奉献されたが、現存する建築の大部分は、大修道院長ウード・クレマンの指揮により、1231 年に着工されたものである。
身廊天井のリヴ・アーチを受けるつけ柱は大アーケードの頂板やトリフォリウム、高窓の位置に作られる蛇腹によって切断されことなく、床から起拱点まで立ち上がり、骨組構造の垂直性を純粋な形で強調している。

＜シャルトル大聖堂 1194~1225 頃＞ フランス

ゴシック建築は細かな意匠にまで縦長のプロポーションを作り出している。柱に鉛直方向に溝を入れることで、「2.2 縦線の強調」とも分類されるが、一本の柱を、細い縦長の柱が束になっているように見せかけている。

図
右 『洗礼者 ヨハネ』
下 ゴシック彫刻

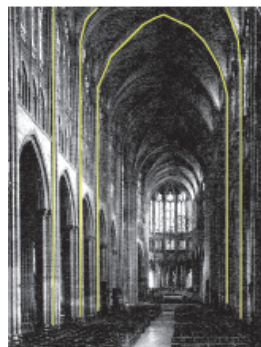
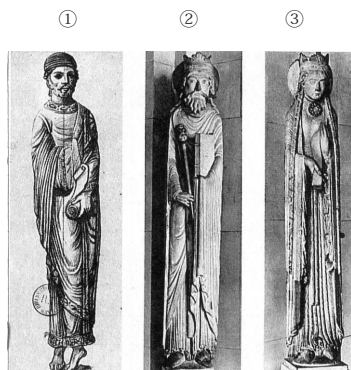


図 サン・ドウニ修道院聖堂身廊内部

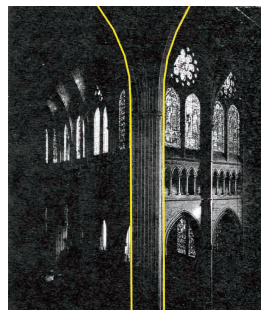


図 シャルトル大聖堂 内部

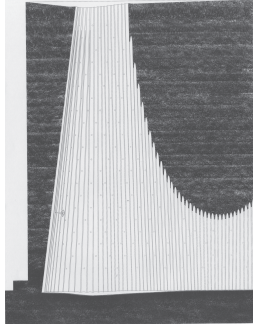


図 聖ニコラウス 野外礼拝堂

＜聖ニコラウス 野外礼拝堂 2006＞ ドイツ

ピーター・ズントー設計。

礼拝堂内部は112本の樹幹によってかたちづけられている。その周りをコンクリートが覆っている。

トップライトの降り注ぐ鉛直方向に引き延ばされた一室内部空間。